

お母石 ぼいし

むかしむかし、諸国を修業しながら行脚をしていた慈母観音様がおりました。観音様は子供を背負い日光街道を南の方に向かって歩み続けました。現在の宇都宮市大網町にさしかかった時のことです。東の方の山並を見つめながら、

「あれあれ、何と美しい山であろう。」

旅の疲れも忘れ、しばらくの間眺めておりました。

その山は、高座山といって、まわりの山に比べ一段

と美しい山並に見えたのでした。観音様は、しばらく

眺めているうちに、

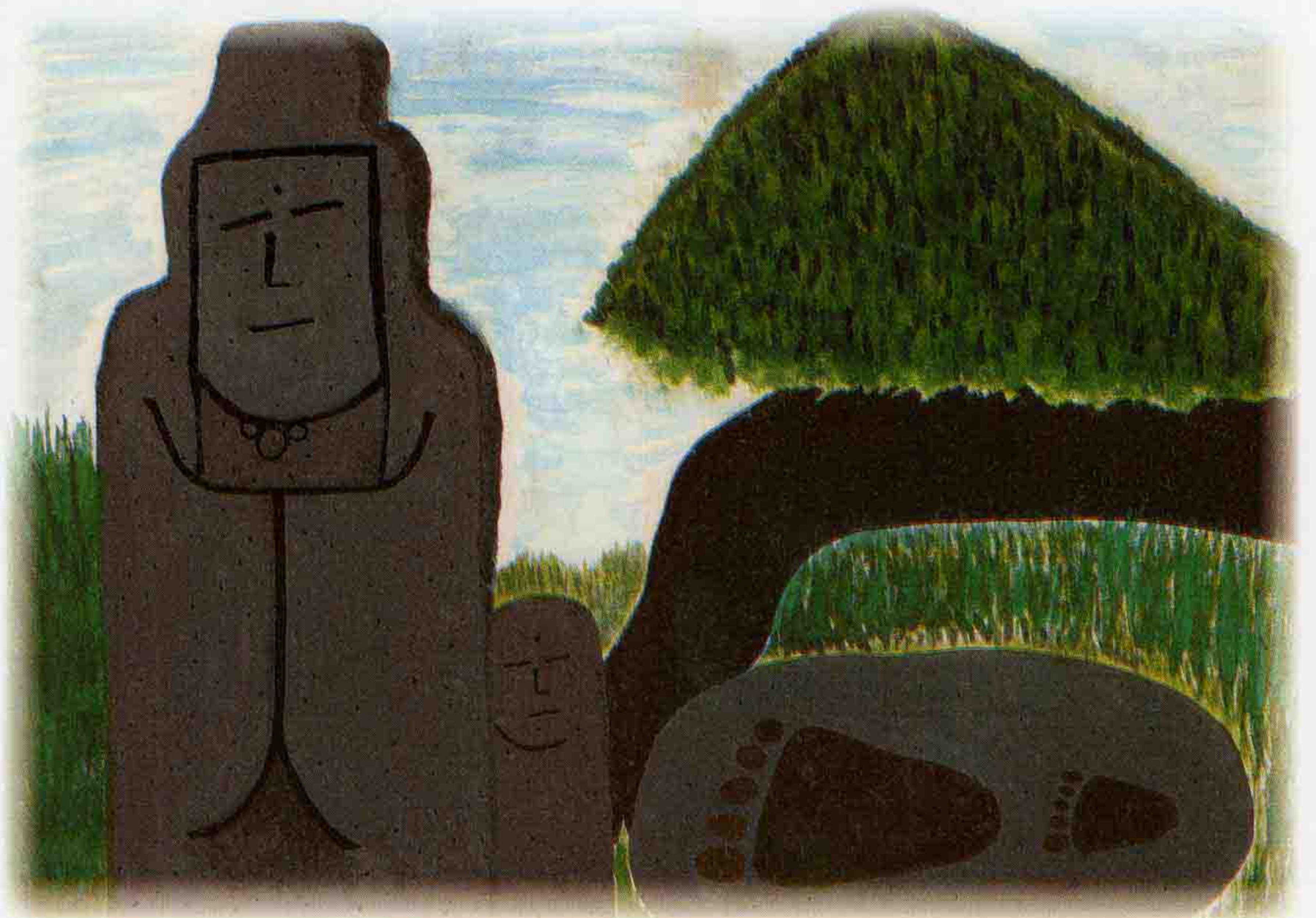
「あの山に登ってみたいものだ。山からの眺めはす

ばらしいに違いない。」

と思い、笹の生い茂った急な道を登り、やっとの思いで山の頂上に着くことができま

た。

「やれやれ、疲れましたな。」



頂上ちやうじやうから下界げかいを見渡みわたしました。眼下がんかに鬼怒川きぬがわの流れなががきらきらと輝かがやき、南みなみは筑波山つくばさん、北きたは日光連山にっこうれんざんが遠く霞かすんで見みえるではありませんか。

「絶景ぜっけいかな、絶景ぜっけいかな。」

しばし景色けしきに見惚みほれていました。

「さてさて、出でかけるとしまししよう。」

観音様かんのんさまは東ひがしの峰みねづたいに山やまを降おりていったのです。登のぼつてきた時ときと同じおなように急きゆうな坂道さかみちの連続れんぞくで、たいそう難儀なんぎをしました。

小半時程こはんときほど、山道やまみちを降おりていきますと、一本いっほんの細道ほそみちに出でることができ、人家じんかが見みえるほどの所ところまでたどり着つきました。日ひも西にしに傾かたむき、うっそうとした杉林すぎばやしの中なかはひんやりとし、

旅たびの疲れつかがふきとんでしまうほどでした。

ふと立たち止とまり、足元あしもとを見ると、大きな石いしが目めに止とまりました。

「ここらで、一休ひとやすみしようか。」

観音様かんのんさまは背負せおった子供こどもをその大おおきな石いしの上うえにおろし、自分じぶんも腰こしをおろしました。その時とき、おろした子供こどもの足元あしもとを見みてあつと驚おどろきました。何なんとその石いしに不思議ふしぎにも子供こどもの足跡あしあとがつ

いていたのでした。それを見みた観音様かんのんさまは自分じぶんの足あしもそつと石いしの上うえにのせてみました。すると同じおなように足跡あしあとがついたではありませんか。

観音様かんのんさまは自分じぶんがこの地ちを通とおった証あかしとして、この地方ちほうの人々ひとびとに何か施なにかしを残のこしておこうと



お母石

考えたのでした。そこで、観音様は、この石に向かつて、
「村人の願い事をかなえてくだされ。」
と念じながらその場を立ち去ったのでした。

やがて、日もとっぷり暮れかかるころ、
観音様は、山裾の一軒の民家にたどり着
きました。

「わたしは、諸国を旅し、修業をつんで
いる者、一夜の宿をお願いしたいので
が。」

といいますと、民家のお爺さんと、お婆
さんが快く迎えてくれたのです。

一夜をすごした観音様は、

「もし子供の夜泣きに悩んでいる者があ
れば、この山中にある石に、
し、お参りをすれば子供の夜泣きが止ま
ります。」

と村人に告げて立ち去りました。

このことを知った村人たちは観音様の教えのとおり山中の石にお参りをするようになり、

「本当に夜泣きが止まったぞや。ありがたいこつた。」
と喜んでということですよ。

以後、誰いとうとなくこの石を『お母石』と呼ぶようになりました。現在でも時折お参りをする人があるのか、初殻が供えられているのを見ることがあります。